

あなたの心を温かくしたストーリー、教えてください。

第12回



# 第12回「小さな助け合いの物語賞」エッセー(作文)募集

## 小さな助け合いの物語賞

エッセー  
(作文)  
募集

ふとした触れ合いから生まれる助け合いの心を大切にしたいものです。

誰かを助けた、誰かに助けもらった記憶…  
どちらもあなたの人生を豊かにしたに違いありません。  
そんな心温まる感動を、大勢の人にも分けてください。

あなたの文章が心に灯をともし、読んだ人が、また誰かのために何かをする。

そんな素敵な助け合いの輪が広がるかもしれません。

### 2021年9月3日(金)必着

選考・発表：10月15日(金)

〒105-7208 東京都港区東新橋1-7-1 汐留メディアタワー 8F  
「小さな助け合いの物語賞」応募事務局

メール [tasukeai@shinyokumiai.or.jp](mailto:tasukeai@shinyokumiai.or.jp) メールタイトルは「助け合い応募」としてください。

しんくみ大賞……1編 20万円 未来応援賞……2編 5万円(図書カード)  
しんくみきずな賞……1編 10万円 ハートウォーミング賞……10編 1万円

詳細は、一般社団法人  
全国信用組合中央協会  
ホームページをご覧ください。  
<https://www.shinyokumiai.or.jp/sakubun>



テーマ

誰かに助けもらったときの感謝の気持ち、誰かを助けたことで得られた豊かな心、誰かと助け合って何かをしたときの感動など(家族や友人、同僚など身近な関係での助け合いは対象外となります)。

文字数

800～1200文字

締切

2021年9月3日(金)必着

応募方法

専用の応募用紙に次の①～⑩をご記入のうえ、作品と併せてご応募ください。  
①表題(タイトル) ②氏名(ふりがな) ③郵便番号 ④住所 ⑤電話番号 ⑥年齢 ⑦性別  
⑧当コンクールを知ったきっかけ ⑨職業(または学校名・学年) ⑩エッセー(作文)の文字数  
※専用の応募用紙および応募要項については主催者ホームページに掲載しています。

応募宛先

〒105-7208 東京都港区東新橋1-7-1 汐留メディアタワー 8F  
「小さな助け合いの物語賞」応募事務局  
メール [tasukeai@shinyokumiai.or.jp](mailto:tasukeai@shinyokumiai.or.jp)  
メールタイトルは「助け合い応募」としてください。

賞の種類

しんくみ大賞 最優秀作品  
1編/20万円  
しんくみきずな賞 人と人のつながり・きずなが感じられる作品  
1編/10万円  
未来応援賞※ 青少年を対象に、今後の人生にプラスとなるような助け合いの作品  
2編/5万円(図書カード)  
ハートウォーミング賞 助け合いから生じる人に対するおもいやり、やさしさが感じられる作品  
10編/1万円

※未来応援賞は、18歳以下(2022年3月31日時点)に贈られる賞です。

選考・発表

審査結果は10月中に一般社団法人 全国信用組合中央協会のホームページにて入賞者の作品・氏名・学校名を発表します。上位入賞者は10月15日(金)に東京で行われる全国信用組合大会で表彰します。  
※新型コロナウイルス感染症が拡大している状況を受け表彰式を中止する場合があります。

注意事項

- 応募作品は自作・未発表の個人作品に限り、連名での応募はご遠慮ください。
- 日本語作品のみが選考対象です。
- 応募作品について著作権侵害の争いが生じて、主催者は一切の責任を負いません。
- 入賞作の一切の権利は主催者に帰属し、主催者が自由に使用できることとします。
- 入賞作は主催者がインターネット上で使用したり、作品集を制作する場合があります。
- 応募に関する個人情報は、受賞作品の発表・連絡以外には使用しません。
- 応募作品は返却しません。
- 盗作・二重投稿は固くお断りいたします。左記行為が判明の場合、表彰および賞金の授与を取り消します。
- 選考過程に関するご質問には一切お答えできません。

主催

一般社団法人 全国信用組合中央協会

協賛

全国信用協同組合連合会・全国信用組合厚生年金基金

後援

金融庁・金融広報中央委員会

必ず、  
応募用紙を  
添付してご応募  
ください。

一般社団法人  
全国信用組合中央協会





# 「物語」を あなたに お届けします。

昨年の受賞作品3編をご紹介します。

誰かが誰かを助けた小さな「物語」が、あなたの心を温めてくれたなら、  
次はあなたの「物語」を届けてください。

## しんくみ大賞

### あたたかな小さい手のリレー

山崎 浩敬

私は、視覚に障害があります。平成十七年に、仕事を休職して視覚障害者リハビリテーション施設で、復職に向けた訓練を一年間受けて復帰しました。

白杖を持ってバスでの通勤でした。中途障害の為、当初は不安でいっぱいでした。会社に着くと、ほっとして緊張がほぐれて、何もできない状態、という毎日でした。

朝の通勤に使うバスには、和歌山大学附属小学校の児童が乗っています。ある朝、「おはようございます」というかわい声が聞こえました。「バスが来ました」また声が聞こえました。そして、私の腰のあたりに温かい小さな手があたりました。そして、バスの入り口前まで誘導してくれて、「階段です」と言い、背中を入り口方向に押し出してくれました。座席に座っている子に向かって、「席に座らせてあげて」と言ってくれました。感動です。私は遠慮しながら、「いいの？」と言うと、「座って」と返事が返ってきました。そして三年が過ぎ、その子も中学生になりました。でも妹が、その手引きを引き継いでくれて、私をバスに乗せてくれています。

バスを降りる時も同じです。バスを降りると歩道を歩く私の腰を小さな温かい手で押してくれて、点字ブロックの上まで誘導してくれます。私は、大きな声で「ありがとう。車に気を付けてね」と言っている時も頭を下げます。

そして、彼女も小学校を卒業しました。でも毎朝、背中を押して誘導する彼女を見ていた周りの子供たちにこの作業は引き継がれています。今では、誰かが背中を押す誘導をしてくれています。

温かい小さな手の小さな親切が、次々と受け継がれています。

あれから十五年以上、私も退職まであと一年と半年、失明をした時は絶望のどん底でしたが、温かい手の小さな親切のリレーで、退職まで何とか頑張れそうです。

この子供たちが私を通じて何かを知ってくれたかな、学校の勉強でない何かを学んでくれたかな、と毎日、通勤で温かい小さな手と共に感じております。誰かに教わるのではなく、誰かがはじめた親切、それを見ていた周りが、何も言わないのにやってくれる。なんて素晴らしい国なんだ、と感じております。

### 出合いの終着駅

藤田 崇弘

「ぼく、おるる駅に着いたよ」  
知らないおじさんに肩をたたかれて、ぼくは電車からおりることができた。

ぼくは電車が好きだ。小さいころから電車のおもちやで遊んで本もたくさん持っている。幼稚園も電車を通った。今は毎週水曜、学校帰りに一人でおばあちゃんの家まで電車で行く。窓から外を見るのも、ふみ切りの音を聞くのも、車しようさんのアナウンスもどれもワクワクする。だからいつもぼくちり目が開いているはずなのに、この日はいつの間にか眠っていたようだ。おじさんにお礼を言うのも忘れて、あわてて飛びおりました。心臓がバクバクして時限爆弾みたいだった。

「ふーっ。ききいっばつ。たすかつた。あぶないところじゃった」  
でもおじさんはどうしてぼくの降りる駅を知っていたんだろう。何度考えても不思議だった。

次の水曜日、電車に乗ると助けてくれたおじさんがいた。この前のお礼を言わなくて声がかげられなかった。勇気が出なくて声がかげられなかった。そしてまたあの疑問がうかんだ。ぼくのおりる駅を知っているのは何でかな。魔法使いなのか。宇宙人なのか。頭の中はグルグルおじさんと目が合った。おじさんはにっこり笑顔だった。ぼくは少し頭を下げた。

「水曜日は電車に乗るんだね」

おじさんがやさしく話しかけてくれた。ぼくは

「はい」  
としか答えられなかった。ちゃんとお礼も言えなかった。きつとおじさんは前からぼくのことを気にしてくれて、おるる駅も知っていたんだ。だから眠っているぼくを起こしてくれたんだ。でも、知らない人に声をかけるなんてすごい。おじさんはすごい。

今は夏休みで電車にのっていない。だからおじさんにも会えていない。二期期のはじめの水曜日、勇気を出しておじさんに

「ありがとう」  
と言いたい。

電車はぼくにとって特別な場所だ。幼稚園のとき、電車の中で友達になった二つ年上のれんくんや、駅でお母さんを探せなくなつて泣きそうになった時に一しよに探してくれた高校生のお兄さんや、駅をまちがえた時に電話をかけてくれたおじさん。忘れ物をあずかってくれた駅員さん。ぼくはいつも失敗やハプニングを起こすばかりだけど、みんなが助けてくれる。ぼくも困っている人を助けられるようになりたい。

電車は人と人をつなぐレールを走っている。たくさんのありがとうを乗せて電車は走っている。ぼくもいつか、ありがとうを言うてもらえるような人になりたい。その日にむけて「しゅっばつ、しんごう」

## 未来応援賞

### 小さな助け合いの輪をつくる 道本 ニコヤ

八月一日。私は元気に十五歳を迎えることができた。こうして、私がこの世界で中学三年生として生きることができているのは知らない方々に善意の協力をいただき、医療機関の方々に助けてもらい、家族に支えられてきたからだ。

私は十二歳の時、重い病気にかかり、半年以上の入院を強いられた。その中で、抗癌剤治療をし、その副作用で髪の毛がなくなつた。また、血液の成分が少なくなり、輸血を三十回以上行つた。そのおかげもあり、徐々に体力をとりもどし、お医者さんや看護師さんに見送られながら病棟を出ることができた。こうして私のキツくて辛い入院生活は幕を閉じた。しかし、退院したら全てが解決とはならず退院から半年程はウィッグをつけた生活だった。そのウィッグは知らない方がヘアドネーションをして作られた私の宝物だ。今は、もちろん自分の髪で、体調が悪くなることも少なく、通院も三カ月間一度くらいで、とても元気に毎日を送ることができている。

「ふじっ。次は私が社会に恩返しする番だ」と最近よく思う。そう思うのには理由がある。

八月七日、私の母は骨髄ドナーになって、骨髄を提供するため入院した。そして私の母と姉は献血ができるときには献血をかかさず行い、姉はヘアドネーションも行っている。

また、姉の将来の夢は看護師だと言ふ。本当は私がすべきことなのに、何も出来ない無力感を感じる。

この世界では、見えない相手を救うためにたくさんの人々が献血、ヘアドネーション、ドナー登録等に協力している。これは「助け合い」で成り立っていることだ。自分の時間をけずって、時には痛い思いまでして辛さやキツさと闘っている人々を助ける。これがまさに「助け合い」ということだと思ふ。私は救ってもらふ、助けてもらう側だった。次は救う、助ける側になりたいと強く思ふ。

私には夢がある。それは医者となつてたくさんの人々に未来を与えることだ。闘病生活を通して、医療関係者がすばらしいと思つたことはもちろん、コロナ禍を通して、医療関係者がたくさんの人々に必要とされている存在であることを改めて強く感じさせられた。

私は、今はまだ中学生で社会においてとても小さな存在だ。また、私にできることは限られている。しかし、受験生の今、進路について本格的に考え、これから助けを必要としている人達の心に寄りそつたためにどうしたら良いかを自分の中で深めていきたい。

この社会全体で、小さな助け合いの輪がたくさん作れるように、これから一歩ずつ未来に進んでいこう。